

# 生徒の主体性を育む

## 「多様な価値観との出会い」と

## 「教師の問い掛け」

主体性は高校段階だけで育めるものではない。義務教育、高校、大学、そして社会と、それぞれの段階で求められる主体性を踏まえ、連続性をもって育成にあたるのが求められるだろう。中学、高校、大学、企業それぞれの立場の指導者が、主体性についての課題と育成のあり方について話し合う。

### 若い世代は「主体的」なのか？

**大学でも企業でも主体性の育成が重要なテーマ**

**太田** さまざまな企業の人事担当者と話の中で、最近の若手社員について共通する認識は、「指示を受けた範囲ではしっかりと取り組むが、言われた以上のことはしない傾向が顕著である」ということです。かつては長時間労働が当たり前で、会社には人生を捧げるような生き方がよしと

されてきましたが、近年、女性の社会進出や男性の家庭参加が進み、ダイバーシティ（多様性）という考え方が広まっています。つまり、社会のあり方がこれまでとは大きく変わった今、私たちは限られた時間の中で今まで以上の成果を出さねばならず、より主体的に仕事に取り組むことが求められています。これは決して若手だけの話でなく、ベテランの社員にも同じことが言えます。

**堀江** 主体性は大学の学びにおいて

も重要です。1年次のうちに主体性を獲得できた学生は、学内の教育資源を活用して、確実に成長していきますが、受け身な態度のままの学生は卒業のための最低限の学びしか経験しません。大学でも、いかに学生の意識を受け身の学習者から自分で学びを構築できる主体的な学習者に切り替えられるかが、特に初年次教育において重視されています。

**中高において主体的な学び方、生き方を獲得させたい**

**野村** 与えられた課題には真面目に

取り組むが、自分で学習の内容や量を判断することが難しい高校生が増えてきているのは確かです。高校では予習中心の自立した学習習慣が必要ですが、最近の生徒にはそれが成立しにくくなっています。高校入試までに、塾などで与えられる課題をこなす学習に慣れてしまったためだと考える高校教師は少なくありません。**桑田** 本校の場合、将来は地元の公務員になりたいと考える生徒が増えています。しかし、「公務員になってどんな仕事がしたいのか」「地元の30年後をどのように展望し、どんな貢献をしたいと考えているのか」



(株)野村総合研究所  
人材開発センター  
主任システムコンサルタント  
**太田百合子**  
おおた ゆりこ



立命館大  
国際部副部長  
国際教育推進機構准教授  
**堀江未来**  
ほりえ みき



福岡県・  
朝倉市立十文字中学校  
校長  
**佐々木隆良**  
ささき たかよし



長崎県立長崎西高校  
教務主任  
**野村雄大**  
のむら たけひろ



島根県立出雲高校  
英語科  
**桑田直子**  
くわな なおこ

と尋ねても、多くの生徒はきちんと自分の言葉で答えられません。地方を取り巻く厳しい状況を十分に理解した上で、主体的に自分の生き方を考える力が生徒にはもっと必要だと感じています。

**佐々木** 中学校は高校以上に多様な層の生徒がいますが、全体的に指示待ちの傾向が強いのは同じだと思います。学力が非常に高い生徒でも、確固たる将来の目標が持てておらず、志望校決定を保護者や教師に頼ってしまっているところがあります。私は、主体性とは、将来の夢に

## 主体性を多様な価値観の中で育てる

**多様性に触れる中でお互いを認め合う経験**

**太田** 若者たちが主体性を発揮できない理由は、彼らがずっと正解至上主義の中で生きてきたからではないでしょうか。自ら動くことによって不正解を選び失敗するくらいなら、受け身と言われようとも、指示を待った方が安心だからです。でも、実際に社会に出ると、正解が1つではない問題、そもそも正解が存在しない問題の方が多いいのです。それ

向かって今自分にはどんな体験が必要なのかを考え、生き方を自分で築いていく力だと考えています。生徒たちが、将来の夢を今の自分とつなげられるよう、中学校段階からさまざまな形で生徒に働き掛けていくことが必要でしょう。

なのに正解至上主義のままでは、社会人として主体的に動き出すことは出来ません。

**堀江** 授業で「思ったことを自由に発言してください」と促しても、生徒たちにとっては一步を踏み出すことがとても難しいようです。「答えは1つではありませんよ」と説明しても、それでも模範的な答えを探している気がします。学生たちはそれまでの学校での経験から、教室という場で間違えたり、他の人と違う考えを言ったりすることを恐れ、みんなと同じであることを望んでいるよ

うです。そんな学生たちを変えるには、実際に多様性に触れる中で、人は多様であってよいのだと認め合っていく経験が必要だと思います。試行錯誤を繰り返して、間違いだと思っていたことが正解だと気が付いたり、正解が分からない状況の中で自分の仮説を試したりするような経験を積んでもらいたいと思います。

**佐々木** ただ、学校という場で子どもたちに失敗を経験させるのは、決して簡単なことではありません。多様な子どもたちが集まる中学校では、生徒が失敗して、自信を失ってしまわないように、教職員は配慮を重ねています。まずは「やれば出来る」という自己肯定感を大切に育てながら、小さな失敗をどうプログラムしていくかが重要だと思います。

**進路観の衝突や探求的な活動の中で失敗を経験させたい**

**野村** いわゆる進学校では、特に生徒に大きな失敗をさせたくないという思いが教師の中で強いと思いま

す。人生における失敗経験の重要性は十分に理解していますが、それでも正直なところ、ジレンマはあります。日々の授業でも、多様性よりも効率的に正解を求めていく場面がどうしても多くなります。ただ、そうした進学校としての現実があるからこそ、私は進路選択の場面で多様な価値観との出会いを生徒に経験させたいと思います。第一志望にどこまでこだわること、保護者や担任と語り合い、大人の価値観とも向き合った上で自分の生き方を自分で決めてほしいと生徒には話しています。

**太田** 1人の母親として、出来ることなら子どもに大きな失敗はさせたくないと思います。ただ、大学入試などでの大きな失敗経験ではなくとも、日々の高校生活で人とかかわりながら、小さな失敗で悩み、もがき、決断する経験を積み重ねること、価値観が育ち、多様性を受け入れられるようになると思います。

**桑田** 効率的に正解を求める場面が多い進学校で、進路実現という使命を全うする中で出来るチャレンジの場は学校行事や課外活動であり、本校の場合、その1つがSSHだと



思っています。SSHでは、グループ内で多様な価値観をぶつけ合いながら、正解がない研究テーマに取り組みことが可能だからです。「こうすればうまくいく」と教師が正解を教えるのではなく、ぎりぎりまで自分たちの力だけで高い目標に取り組むことで、生徒は小さな失敗体験を重ねながら本物の成功体験をつかむことが出来ていると思います。同時にSSHは、効率的に正解にたどり着く教科学力を身に付けながら、それを正解のない問題に活用していく力を身に付けるきっかけになると期待しています。

**子どもの発達に応じて学びに転換できる失敗体験を提供する**

**佐々木** 私は本校の教員に、「生徒

## 「多様な価値観と出会える場として 課外活動などを活用」

島根県立出雲高校 桑田直子

を安易に褒めてはいけない」とよく話しています。小さな子どもならばそれもよいでしょうが、中学生になってレベルの低いことで褒められ続けているのは、生徒はいつしか努力をしなくなるでしょう。だから、「失敗を重ねた上での本物の成功体験」という桑田先生のお考えはとても重要だと思います。本校では、2泊3日で20時間以上の自学自習に取り組んで学習習慣を身に付ける学習合宿

## 多様な価値観との出会いをいかにつくるのか

**多様性との出会いの意味を生徒が整理できるような教師が問い掛ける**

**桑田** 多様な価値観との出会いの1

や、36キロ以上の山道を8時間かけて歩く英彦山遠行会など、生徒が達成感を味わう行事を開催しています。普段の生徒会活動などでも、「前年度の踏襲ではなく、新しいことにチャレンジしよう」と、教師が生徒に声を掛けて、取り組みのハードルを上げることで、生徒たちに試行錯誤させています。

**太田** きつとそうした機会は、中学校から高校、大学と、それぞれの段階で継続していくことが大切なのだろうと思います。

**堀江** 子どもが失敗を受け止め、それを学びに変えられるかどうかは年齢にもよるでしょう。その意味では、大学生はたくさん失敗していいし、それを学びに変えられる年代なのだと思います。

つとして、「一流との出会い」も高校生には有意義だと考えます。研究者や実業家、政治家など、SSHの活動の中で、さまざまな分野の最先端を走る方々との出会いを生徒に提





供しています。とはいえ、一流のものに触れて「すごかった!」と感動するだけでは主体性の向上にはつながりません。明日の自分につながるような振り返りが出来るように、教師が「では今、君は何をすればよいと思うのか」と問い掛けることが必

要だと思いません。

**野村** 本校もSSHの活動を行っています。高度な研究に取り組むだけでなく、その意味を生徒が自身身に問い掛けていくことも大切だと思えます。本校の生物部の生徒が、アメリカで開催されたパネルディスカッションに参加したのですが、自分の研究について「将来、社会でこんなふうになかしたい」と自信をもって語るアメリカの高校生の姿は、生徒たちにとっても新鮮で、学びの意味を考えるきっかけになったようです。そうした、同じような年代だけでも、自分とは違う考えを持つ人との出会いが、生徒を成長させていくのではないのでしょうか。

**桑田** 日本の生徒に比べて欧米の若者は、社会にどうかかわりながら生きていくか、強く意識しているように思えます。共同研究や一流との出会いなど、多様な体験の場を与えながら、生徒に都度、自分が今何を大事にしているかを語らせたり、書かせたりすることが、学びのモチベーションにつながる気がします。



### 多様な体験の場を 意図的に、数多く つくっていく

**野村** もっと主体性を身に付けてほしいと生徒に対して思うのは事実ですが、学校行事などの運営を任せるとこちらの想像以上に頑張ってくれることも実はよくあります。ただ時々、教師からすると突拍子もないことに挑戦しようとすることもあり、そんな時は「体験を通した学びのために、これくらいは認めてあげたい」と思いながら、生徒指導の観点でストップさせることもありあります。一つひとつの判断は簡単ではありませんが、多様な体験の中で生徒の発想、視野を広げるため、私たち

### 「生徒が変わるための 多様な体験の機会を 意図的に仕組む」

福岡県・朝倉市立十文字中学校 佐々木隆良

教師、そして保護者も、ある程度の失敗を見通した上で、生徒を見守る覚悟が必要だという気がします。

**佐々木** 多様な体験の場が必要なのは、裏を返せば、それぞれの生徒が何をきっかけに変わるかが分からないからです。だから、私たちは生徒が変わるチャンスになると期待できるものは、可能な限り取り入れて実施しています。本校では、キャリア教育を中核に据えた啓発的体験活動を多彩に実施しています。班別での大学訪問や卒業生との対話を盛り込んだ東京への修学旅行、弁護士やスポーツ選手などのプロフェッショナルを学校に招き、学びの意味を語ってもらう「文中未来塾」などがその一例です。多様な価値観との出会い



## 「異なる価値観との 出会いを成長に つなげる働き掛けを」

立命館大 堀江未来

から志を抱くことが出来れば、学習への取り組みは必ず意欲的になります。そして、そうした多様な取り組みを先生方に負荷を掛けることなく

## 語り合うことで多様性の中の自分が見える

多様な価値観との出会いを  
成長につなげる  
ガイドラインの確立を

**堀江** 高校生や大学生にとつては、多様性への接点として、海外留学プログラムや留学生と共に学ぶ異文化体験はとても有効だと思います。日本では当たり前前の価値観が海外では通用しないこと、反対に、日本では認めてもらえなかった価値観を海外で評価してもらえらることもありま

実施するためには、私たち管理職のマネジメント力が問われるのだと思います。

す。そうした中で、自分に自信が持てたり、逆に自分の不足を直視する余裕が生まれたりすることもあろうでしょう。多様な価値観との衝突で自分の余計なものがそぎ落とされ、自分の根幹が見えてくるのです。ただ、異文化を体験すればそれだけでよいということではなく、異なる価値観や行動様式に出会った時の自分の反応を振り返り、なぜ異なる価値体系が構築されたのか客観的に考察できるように、経験を成長に変えるための

働き掛けをガイドラインとして確立させ、教職員がサポートすることが必要です。

**太田** 弊社では、主体性の向上を目的として、社外講師を招いて社員に気付きを得させたり、社員同士が経営課題について主体的に議論したりする場を3年前から提供しています。ただ話を聞くだけでなく、自分はどうしたいかを考え、語り合うプロセスは社会人にとつても大切です。実際に話をする事で自分と他者との違いが実感できるわけですし、本当の課題と解決方法は人と話しながら導き出すものだからです。そして語り合う中で、自分の考えを論理的に伝える力の重要性も実感できます。社会人になって、私たちは「伝えた」と「伝わった」は全く別ものだと痛感しますが、論理的に伝



え、論理的に受け止める力は、多様性を受け入れる力に通じます。

## 教師自身に 多様な価値観との 出会いが必要

**桑田** 受け身と言われる生徒が、社会に出た時に、新しい価値を生み出せる人材に育つために、私たちはひたすら生徒に問い掛け続けるべきなのでしょう。当たり前を疑う視点がある、社会をつくり、変えていくという意識を私たち自身がしっかりと持たなければいけないと思います。  
**太田** 私もそう思います。若い世代に多様な価値観との出会いを求めるのであれば、私たちがまず多様な価値観と触れ合うことが必要です。先生方には、子どもたち以上に

## 「生徒と語り合うためには 教師自身の 力量の向上が不可欠」

長崎県立長崎西高校 野村雄大

外の世界の多様性を知っていたら、**掘江** 先生が社会の変化を敏感にキャッチしてこそ、子どもたちへの言葉は心に響くものになるのではないのでしょうか。

**桑田** 私たち教師の働き掛けを通して、生徒が「今、自分が当たり前だと思っている考え方、生き方とは全く違うものが、この社会にはたくさん存在しているんだ」「思ってもみなかったようなことが、自分の生きる社会で行われているんだ」と気が付けば、生徒たちは今のままの自分では駄目だと、きつと自ら動き出すとするのでしょね。

**野村** 学校行事などは、多くの学校が同じような活動をしています。そこでの教師の働き掛けによって、生徒の成長が大きく変わること。私たちはよく知っています。学校行事の前後の面談で生徒の気付きを促す技術など、生徒と語り合うための教師自身の力量の向上は、多様な価値観との出会いを生徒の成長につなげるためには不可欠だと私も思います。そして、高校教師として私がこ

れからも大切にしたいと強く思っているのは、やはり基礎学力です。

**堀江** 私も、正解が存在する世界においては、正解を素早く見つける基礎学力は大切だと思います。最近では、英語はそれなりに話せるけれど、正確に読んだり書いたりすることが苦手な生徒が目立ちます。もしかすると、こつこつと文法や語彙を学ぶ過程をおろそかにしてきたのかもしれない。しかし基礎学力は、学生が主体性を発揮して学ぶ際の土台として確実に必要です。

**佐々木** 中学、高校段階で基礎学力を身に付けておかないと、多様な価値観と向き合った時にその価値を理解できませんからね。そして、さまざまな考え方が存在する世の中に子



どもたちを送り出すからこそ、学校には揺るぎない道徳心を子どもの内面に養わせる責任があると思えます。勉強だけ出来ればよいというわけではないこと、夢や目標、他者への貢献意識を持つて、よりよく生きていこうという向上心、そしてやれば出来るという自己肯定感を大事にしながら、子どもたちを高校へと送り出し、さらに大学、社会と連携して、みんなで大きく育てていきたいと思えます。

**子どもたちが自分の頭で考える問い掛けを**

**太田** 教わることに慣れた若者たちに、いきなり主体性を求めることは

「君はどう思う?」と問い掛け、自分の頭で考える機会をつくる」

(株)野村総合研究所 太田百合子

実は大変酷なことであることは分かっていますが、それでも現実には、社会に出たらすぐにチームの一員としてさまざまな価値観を自分の価値観と統合しながら働くことが求められます。先生方には、「何が正解だと思うか?」という問い掛けだけではなく、「君はどう思うか?」と問い掛け、子どもたちが自分の頭で考える機会を、これからも学校生活の中にたくさん取り入れていただきたいと思えます。そして、私たち大人は若い世代に対して、「あえて答えを教えないことで育てていく」ということをもつと強く意識していくことが必要なのだと思います。

**堀江** 今、子どもたちが育っている社会と、大人たちが育ってきた社会とでは、求められる人材要件は大きく違います。たとえ海外に出ずに国内で働くとしても、個人で切り開く力が求められる時代です。そうした社会の現実には私たち大人もしっかりと目を向け、社会に対する認識を常に最新のものにして、子どもたちに語ることが大切だと思います。